

【B】 次の文章は『平中物語』の一節で、主人公の男が気の晴れない日々を送っていた頃のことである。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

かかるほどに、冬になりぬれば、いとつれづれに、世の中のうらめしきことのみ思へば、苦しきを、行ひはゆるさ^aれず、「心慰めに、東の方へまからむ」と、親に申しければ、「なほ、この正月の司召に過ぐせ。それにともかくもあらずは、唐土へもいませよ」とのたまふに、さはりて、待ちけるに、その司召に、むなしうなりぬれば、思ひ憂^うじはてて、さ言^ははでえあるまじき人のもとに言ひやる。

A 浮き草の身は根を絶えてながれなむ涙の川のゆきのまにまにとあるを見て、さりととも、ふとはえ行き離れじと思ひて、返し、

B おくれるて嘆かむよりは涙川われ降り立たむまづながるべく

かくてまことに、この男、ものへいなむと思ひたる気色を見て、親、明け暮れ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかにいなむと言ふは、親をいとふか。なほ、この正月の司召を【c】待て」と、せちにのたまふ。思ひわづらひてながらふるに、その司召にもかからずなりにけるに、深く「世の中憂きこと」と思ひ憂^はじはてて、帝の御母后のおもと人、この知れる人のなかに言ひやる。

なりはてむ身をまつ山のほととぎすいまはかぎり^りと鳴き隠れなむ

とありけるを、おもと人らあはれがりて、「³かくなむと申したる」と啓しければ、父^(注4)、はたその後の甥^{おひ}にて、「罪咎^{とが}もなきに、かくてさぶらはせたまへば、人の国にも隠れ、山林にも入りぬべし」と、せちに奏したまへば、「宮仕へせず、空めきたりとて、懲^とらさむとて、取りたるぞ。いまは懲りぬらむ」とて、その司召の直物^(注6)に、もとの官^{つかさ}よりは、いますこしまさりたるをぞたまひける。

(注) 1 正月の司召——正月に行われる、中央官職を任命する任官式。

2 さ言はでえあるまじき人——男が自分の気持ちを伝えずにはいられない女性。

3 おもと人、この知れる人——おそばに仕える侍女で、この男が知っている侍女。

4 父——「この男」の父親。

5 空めきたり——浮わついている、の意味。

6 直物——「司召」の後、任官の誤りや追加を審査して、改めて任命する儀式。

問一 次の意味を持つ単語を、第一段落より抜き出して終止形で記せ。

(1) 退屈だ

(2) 妨げになる

問二 傍線部 a「れ」・b「む」の助動詞の意味をそれぞれ漢字二字で記せ。

問三 空欄 c に入る語として最も適当なものを、次のイ〜ホのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- イ ぞ ロ こそ ハ だに ニ さへ ホ や

問四 傍線部「さりととも、ふとはえ行き離れじ」の解釈として最も適当なものを、次のイ〜ホのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- イ ひよつとしたら、永遠に離ればなれになるかも知れない。
ロ たとえ何があっても、あなたとは別れることはできない。
ハ いくら何でも、急には家を離れて出て行けないだろう。
ニ だからといって、そんなに遠くに行くことはないだろう。
ホ いうまでもなく、私から離れて行くことはできないだろう。

問五 和歌A・Bの説明として最も適当なものを、次のイ〜ホのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- イ Aで男は、悲嘆のあまりにあてどなくさすらいたいと詠み、Bで女は、男に取り残されるのは耐えられないと詠んでいる。
ロ Aで男は、涙が川のようにとめどなく流れる日々は情けないと詠み、Bで女は、悲しみを男と共有していたいと詠んでいる。
ハ Aで男は、ぜひと一緒に漂泊の旅に出てほしいと詠み、Bで女は、自分がまず旅立つつもりでいたのだと詠んでいる。
ニ Aで男は、浮き草のような生活はとても苦しいものだとして詠み、Bで女は、嘆いてばかりいることは愚かだと詠んでいる。

る。

ホ Aで男は、浮気な自分を反省していると詠み、Bで女は、男が性格を変えられないのなら別れたいと詠んでいる。

問六 傍線部2「その司召にもかかわらずなりにける」とあるが、なぜそのようになったのか。その理由を六十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 傍線部3「『かくなむと申したる』と啓しければ」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを、次のイ〜ホのうちから一つ選び、記号で答えよ。

イ 無実の罪を晴らしてほしいと、泣いて訴えてきた男に代わって、その願いを帝に伝えたということ。

ロ つらさに耐えかねて、男が遠くへ旅立とうとしているから、とどまらせてほしいと、帝に告げたということ。

ハ 出世の願いが実りそうにないことをはかなくて、男が死ぬかもしれないと、帝の母后に訴えたということ。

ニ 任官の期待も断られた今は、身を隠すよりほかに道がないという男の言葉を、帝の母后に伝えたということ。

ホ 宮仕えより風流な世界に生きたいという男の決意にあきれた気持ちで、帝の母后に告げたということ。